

## Special Essay

## 「走るなメロス」と「走れよメロス」に思う

看護学科 森本 紀巳子

たまたま見たTV番組で、アナウンサーの安住紳一郎さんが、明治大学の教学者斎藤孝さんと学生を前に、太宰治の「走れメロス」をテーマに授業をした。安住さんは、メロスの走る速度を“沈みゆく太陽の10倍の速度で走った”の表現について語った。「太陽の速度は地球の自転速度であり、時速1300km。これは新幹線の44倍の速度、100m走だと時速0.02秒、メロスは世界最速の男ウサイン・ボルトより超速い。このスピードで走れば、周辺2km四方には衝撃波がおこり、凄まじい風と音で物は破壊される。だから『走れメロス』ではなく『走るなメロス』だ。」と日本語と文学の面白さを伝えた。

早速私も、「走れメロス」を読み返そうとインターネットからダウンロードした。同時にネット上で一般財団法人理数教育研究所開催「算数・数学の自由研究」作品コンクール入賞者、中学2年生村田一真さんの「メロスの全力を検証」を見つけ、興味深く読んだ。村田さんは、表現された地理、自然、生活を分析し、メロスが親友を助けるために10里の道を往復する速度を、3日間の足取りから検証した。その結果、「平均時速は往路3.9/km、復路2.7~4/km、最後の死力5.3/kmであり、メロスはまったく速くない。復路の終わりぐらひは最後の死力として走ったが、ただの速歩きだ。遅すぎる。『走れメロス』は『走れよメロス』が合っているなど思う。」と書いていた。太宰治は何と応えるだろうか。

安住さんも村田さんも、太宰が表現した描写を細かく読み取り、想像力をもって独創的に、数量で具現化して捉えていた。2人の読み方からメロスを身近に感じることができた。私は、常々、人の言葉を聴き取る、文章を読み取ることは難しいと感じている。高校生の時、「数学は解答を得た時の爽快感と充実感があるが、国語は“自分の考えを述べなさい”の間に自分の考えを答えても点数がもらえない。国語は苦手である」とスピーチした。国語の試験は、文章表現の解釈に苦しんだ。苦手さを何とか克服したくて、家にある文学全集を片っ端から読んだ。授業中は、先生の話聞き逃さないように、ジッと見つめていた。先生の顔・皺、ベージュのスーツに茶色のネクタイを覚えている。しかし、先生が目をつぶって「ここは～」と解説の言葉を探している間に、私も考えるように目つぶり、私は目をつぶったままで肝心な解説を聞き逃していた。目を開けて解説を聴いていたらと悔やまれる。

本を読むときは、表現された描写を細かく丁寧に読むようにする、日頃の積み重ねが大切なのではないでしょうか。そこから、想像力が創造力に繋がり、独創的な世界が広がるのでしょうか。